

ノ末ヨリ土窖ニ入ザレバ枯レ易シ、

〔増補地錦抄〕美人蕉 花極てくれないなる事、ともし火のごとく、又はざくろの花の色に似り、されば唐にては紅蕉といふ、葉はばせうのやせたるごとくちいさし、花のうつくしきとて、びぢんせうといふといへども、玄からず、此葉をせんじ、女中髪をあらふに、けを長くしてくろからしむ、又は油をとりて、びん水にして、髪をくしけづりて、けのおつるをと、め、かみすぢをふとくし、つやを出し、葉をくろやきにして、かみの油にねり、髪のはげたる所にぬりて、けをせうす、其しるしばせうにすぐれたるとて、名付よし、誠に女は髪のためだからんこそ、人のめたつべかめりといへば、美人蕉とよぶもにくからず、

〔剪花翁傳〕八月開花 美人蕉 紅蕉 花黒紅色、形ち蘭蕉に似たり、開花八月下旬より九月也、方地盆栽物、土回塵、肥油糟、寒中又花前にも入る也、尤時を見合てよし、分株、移、春彼岸よし、花後より三月迄地窖に入る也、

〔草木六部耕種法〕花 美人蕉ハ其葉芭蕉ノ如ク、六七月ニ花ヲ開キ、其色眞朱ニシテ、極テ美ナル者ナリ、暖地ノ産ナルヲ以テ、九月下旬ニ其根ヲ掘リ出シ、藁ニ包ミ、閉藏法ヲ行ヒ、三月ニ至リ出シ、植付ベシ、

蘭名

〔下學集〕草木 芝蘭。二共香華可貴艸也、然日本俗呼芝爲原野短草者、不得其理云云、
〔和爾雅〕草木 蘭花。或名幽蘭、葉如麥門冬而潤、而且勒長及一二尺、四時常、風蘭、蘭、又名桂、獨頭蘭、于蘭譜、又名弱、脚蘭、春蘭、

蘭種類

〔増補地錦抄〕蘭のるひ

大蘭 花うす黄色のやうに見ゆる、さかりの時は、ふん／＼たる香ありて、家内くんずる也、蘭は葉長く大がぶなるをよしとす、大蘭は葉ながし、